

環境思想における新たな胎動——「物語」の視点からのアプローチ——

布施 元（東京農工大学大学院・博士課程）

環境問題は、1960年代の公害問題から現代の地球環境問題へと拡大・深化し、その結果、専門家のみならずふつうの人々にあっても、環境危機の問題性に対する関心や意識の高まりがみられるようになったが、その環境危機は、抜本的に解決されるどころか、悪化の一途をたどりつつあり、そのような事態は、学問および研究に対する新たな要求を突きつけてもいる。環境問題へのアプローチの仕方は3つの方法、すなわち、自然科学的方法、社会科学的方法、そして思想的方法がある（三浦永光『環境思想と社会』）。つまり、環境問題は私たちに対して、それへの対処の仕方として総合的で学際的なものを要求しているのであるが、その総合性・学際性をとくに問われる研究方法が思想的方法であると思われる。1つの学問領域として「環境思想」が脚光を浴びつつあるのもいわれなきことではないだろう。では、環境問題に対して思想的な考察を行なううえで、何をその考察対象とすべきであろうか。

現在、環境思想にかかわる大きな課題としては、脱近代の思想、日本独自の思想、社会哲学への視点、共生の理念、持続可能な社会の解明の5つが認められる（尾関周二『環境思想と人間学の革新』）。私はこの中で最初の点に着目したい。つまり、環境思想を脱近代の思想として捉え、他の学問領域での脱近代をめざす議論と連携していくことである。人類史全体からみると、ほんのわずかな期間しか経験していないような、西欧生まれの資本主義的近代化が、今日の地球環境問題と何らかの関係をもっていること、そのような地球環境問題をいかに解決するかということが、環境思想における大きな課題として位置づけられる。そこで、脱近代の思想としての環境思想を、異なる学問分野での脱近代を志向する議論をも視野に入れながら深めてゆきたいが、その1つの切り口として、近年にわかに耳目を集めつつある「物語」の視点を取り上げてみたい。

その理由の1つは、「大きな物語」が終焉を迎え「小さな物語」に分解されつつあるといわれる、現在の社会のポストモダン状況が疑問視されてきていることとも関連している。あるいはまた、環境思想にかぎらず、環境問題の研究全体、ひいては現在の学問全般にも共通する課題にかかわって、「物語」およびその研究、すなわち「物語論」が注目されている、という事情もある（アラン・ゲイ「物語と環境保護主義の倫理および政治」『環境思想・教育研究』（創刊号））。この、環境問題とのかかわりにおける萌芽としての「物語」を考察することを、私は環境思想の1つの重要な課題として位置づけ、環境問題を扱うなかで「物語」に関心を寄せている諸動向を、脱近代の課題として議論したい。